

第9次北海道酪農・肉用牛 生産近代化計画における 数値目標(案)

令和7年9月

北海道農政部生産振興局畜産振興課

酪農に係る数値目標(案)

- 酪農における飼養戸数については、つなぎ飼い経営体の離農を最大限抑制するとともに、搾乳ロボットを活用した規模拡大を促進することなどにより、現状から約670戸減の4,500戸を目指す。
- 一定程度の離農により乳牛総頭数の減少が見込まれるが、飼養管理技術の向上や乳牛改良などの取組により1頭あたり乳量を増やし、年間生乳生産量の増加を目指す。

	前回の現状 (2018年)	現行計画 (2030年)	現状 (2023年)	次期計画 (2030年)	国
酪農家戸数	5,970戸	5,010戸	5,170戸	4,500戸	—
(内訳(生乳出荷戸数))					
集約放牧(個人)	439	550	216	250	}
つなぎ飼い(個人)	3,477	2,500	2,832	2,324	
フリーストール ・パーラー(個人)	1,058	861	799	510	
フリーストール ・搾ロボ(個人)	250	495	371	455	
組織経営体(200頭↑)	243	387	382	467	
乳牛総頭数	801千頭	837千頭	822千頭	780千頭	749~780 千頭
生乳生産量	397万トン	440万トン	417万トン	428~445 万トン	428~445 万トン

肉用牛に係る数値目標(案)

- 肉用牛においては、全国和牛能力共進会北海道大会を契機とした和牛振興の取組を加速化し、北海道産牛肉のブランド力向上を図ることで、現状の経営体数から微減の1,950戸を目指す。
- 肥育経営体においては、経営コスト削減の観点から、施設整備事業や営農支援組織を活用しつつ一貫経営への転換が進むよう誘導を目指す。

	前回の現状 (2018年)	現行計画 (2030年)	現状 (2023年)	次期計画 (2030年)	国
農家戸数	2,540戸 ↓	2,400戸	2,120戸 ↓	1,950戸	—
(内訳)※					
和牛繁殖経営	1,710 ↓	1,560	1,240 ↓	1,054	}
和牛肥育経営	58 ↓	50	94 ↑	97	
和牛育成経営	—	—	22 ↑	24	
和牛一貫経営	341 ↑	350	370 ↑	389	
乳用種・交雑種 哺育・育成経営	203 ↓	150	38 ↓	36	
乳用種・交雑種 肥育経営	91 ↑	130	85 →	85	
乳用種・交雑種 一貫経営	133 ↑	160	271 ↓	265	
肉用牛総頭数	513千頭 ↑	552千頭	559千頭 ↑	561千頭	

※令和元年（2019年）から農水省畜産統計の集計方法が変更。

飼料生産に係る数値目標(案)

- 飼料作付け面積は、サイレージ用とうもろこしの作付け面積が順調に増えている一方で、牧草の作付け面積の減少が大きく、引き続き、現状の作付け面積583千haの維持を目指す。
- 飼料自給率は、乳用牛における個体乳量の増加等による飼料要求量の増加はあるものの、栄養価の高いサイレージ用とうもろこし等の増産に取り組み、現状を上回る57~59%への向上を目指す。

	前回の現状 (2018年)	→	現行計画 (2030年)	現状 (2023年)	→	次期計画 (2030年)	国
飼料作付け 延べ面積	589千ha	→	589千ha	583千ha	→	583千ha	—
(牧草面積)	534千ha	↘	523千ha	522千ha	↘	517千ha	—
(サイレージ用 とうもろこし面積)	55千ha	↗	66千ha	61千ha	↗	66千ha	—
飼料自給率	52%	↗	62%	53%	↗	57~59%	28%
(乳用牛)	61%	↗	71%	62%	↗	67~69%	※前計画の34% から6%減少 ※全畜種における 設定値
(肉用牛)	20%	↗	30%	27%	↗	31~33%	